

## 屋久島世界自然遺産・国立公園の山岳部適正利用ビジョン(素案)

### 【ビジョン作成の目的】

屋久島世界自然遺産・国立公園における山岳部は、国内外の各種保護制度により自然環境の保全が担保されているものの、遺産登録後の入込者増加に伴う登山者増加や利用集中から生じた課題への対応に追われ、山岳部全体として適正な利用を推進するためのビジョンや基本方針が明確化されてこなかった。

このため、これまでの課題対応型保護管理だけでなく、先を見据えた能動的保護管理を行い、登山利用による自然環境への影響を抑制するとともに、利用者に質の高い利用体験を提供するため、山岳部の適正利用ビジョンを作成する。

(一言フレーズ) ※ペンディング

### 【前提となる認識と考え方】

#### (1) 保全重要性の高い自然環境

九州の南端から台湾の北東端にかけて弧状に配列する琉球列島の一つである屋久島は、フィリピン海プレートとユーラシアプレートの接点に位置し、フィリピン海プレートの沈み込みによる地殻変動により花崗岩マグマがプレートを押し上げて隆起した島である。琉球列島の主要な島々の中で、主に花崗岩で形成されているのは屋久島だけで、屋久島は九州最高峰の宮之浦岳(標高 1,936m)をはじめ、九州内の山岳標高ベスト 8 までを有する、山岳の島(高島)である。このため、島の中に海岸部の亜熱帯的な気候から山岳部の冷温帯気候まで日本の気候帯のほとんどが見られ、それぞれの気候に応じた自然植生が凝縮して垂直的に分布している。

屋久島の陸上の生物相は南限種が多く、本州・四国・九州と近い。これは琉球列島のうち北琉球に属する大隅半島・種子島・屋久島が氷河期に海が後退して九州と陸続きになったことに由来する。また、屋久島の海は黒潮の影響を受けて、温帯と亜熱帯が交錯する場所となり、北限種が多い。北や南の生物相が混じりあっていることが、顕著な標高差とともに屋久島を生物多様性豊かな島にしている。

黒潮の海から発生する暖かく湿った水蒸気は、大気の流れに乗って急峻な地形を一気に駆け上がって雲となり、年間 4,000~10,000mm にも及ぶ多量の雨を降らす。雨は、浸食しやすい花崗岩の山を削り、切り立った峰々と深い谷を形成する。山頂部には浸食されて露出した花崗岩の奇岩が直立し、山肌には大岩が散りばめられているような光景ができる。険しい斜面や悪天時に見られる恐ろしいまでの荒々しさ、人工構造物がほとんどなく、巨岩・奇岩が作り出す景観は、山のやさしい側面だけでなく、怖さをも想起させ、山の恐ろしい側面を今もとどめている。無数の沢となって山中を流れる水や高い空中湿度は、森の巨木や岩を苔で覆い、樹齢数千年のヤクスギなどの巨木や、着生する多くの植物とあいまって、荘厳で幻想的な森林景観を作り出している。山の水は清澄なまま集落まで流下し、人々に飲み水や島民の憩いの場(遊び場)などの恵みを与え海へかえる。姿を変えながら海・山・川・里・海を巡りこれらをつなぐ水(潮流、雲霧、雨、雪氷、空中湿度、流れなど)が屋久島の独特の自然を作りだし人々の営みを支え続けている。屋久島は水の島である。

琉球列島には 900 以上もの島があるが、樹齢数千年のヤクスギからなる原生的な天然林を有し、海岸部から山頂部に及ぶ自然植生の垂直分布が連続的に見られるのは屋久島において他にない。この特異な生態系と優れた自然景観を有していることが評価され、島の約 2 割が世界自然遺産に登録されている。そのほか、世界自然遺産を含む山岳部は、屋久島国立公園をはじめとする国内外の各種保護地域制度によって保護されており、国内有数の自然環境保全の重要性が高い地域である。

## (2) 人と自然とのかかわり—畏敬・感謝・遠慮の心—

屋久島の地形や自然特性は、人々の意識にも大きく影響してきた。山岳部の標高は自然環境（垂直分布）を変化させると共に、島全体の捉え方に独創性をもたらした。島を取り囲む平地に点在する集落から見える山を「前岳」と呼び、薪炭用材の収集などをする生活圏としてきた。一方、集落の背後にそびえる山は「奥岳」と呼び、集落ごとの御岳として崇めてきた。御岳を崇める岳参りは山岳信仰の一つであり、かつて日本中でみられた。屋久島の岳参りは、春には無病息災や大漁祈願の願かけに行き、秋にはその願をときに行く。海と里の恵みを御岳の祠へ供えて祈りを捧げ、山の神が宿るとされる木を里に届けることで、海と山と里をつないで人と山（自然）との関わりを目に見える形で今に残している。島民の心の中には昔から、「奥岳は先祖の霊が帰っていく場所」などとして、山の神に先祖の霊を重ねることで奥岳を信仰・崇拝する気持ち（畏敬の念、感謝の気持ち、遠慮の心）があり、長きにわたり岳参りが続けられてきた歴史がある。屋久島のほかに琉球列島の島々には高い山がないこともあって、屋久島が本格的な岳参りの南限地となっている。

屋久島の地形は集落の立地にも影響している。集落の多くは河川の扇状地や狭い海岸段丘上にあり、周回道路が整備されるまでは船に乗らないと隣集落まで行けない場所もあった。それだけに集落独自の文化や行事が残っている。春の岳参り、夏の盆踊り、秋の十五夜綱引きや岳参り、冬の正月行事など、先祖や山の神に関わる行事や収穫に関わる行儀がある。祭の日は同じであるため、集落間で共有することはなく、祭の仕方や呼び方にはいくらかの違いがあるなど、独自性が残っていく。屋久島の行事は本州・四国・九州の南限であったりもするが、特に盆踊りは死者の霊をなぐさめることに加えて御岳の神へ踊りを奉納することが特徴である。これは法華宗よりも山岳信仰が人々の心の上位にあることを示している。信仰の地である御岳は、頭を垂れて手を合わせる続ける人々の聖地である。これこそが琉球弧の島々の中で唯一、屋久島だけに残った自然に根差した文化である。

一方で、山は、信仰の対象の地であると同時に、島の経済を支える利用もされてきた。大正時代から昭和 40 年代頃までは、林業が島を支えていた。自然を守りながら活用していこうという時代が来て、世界自然遺産地域に登録された今日では、登山を主とする観光が多くの島民の暮らしを支えている。

山岳部は、昔も今も地域経済を支える生活のよりどころとして、島民にとってなくてはならない存在であり続けている。

## (3) 次世代への継承と持続的な利用

屋久島の山岳部には、原生的で極めて保全重要性が高く人々を魅了する自然と、人々に畏敬の念を抱かせる何か（荘厳さ?）、そして時代とともに変わりながらも物心両面で山との関係性を維持し、山に支えられて暮らす人々がある。

屋久島世界自然遺産・国立公園の山岳部の適正利用ビジョンは、前述（1）（2）を踏まえ、次のこと

を念頭に作成する。

- 自然の価値や畏敬の念を抱かせるものを損なわずに守り、引き継ぐこと
- 自然の価値や畏敬の念を抱かせるものを損なわない範囲、方法での利用をすること
- 自然や畏敬の念を抱かせるものの価値や継承の重要性を理解してもらうために、質の高い自然体験を提供すること
- 地域の自然観、人と自然との関わりを踏まえた管理を行うこと
- 過去・現代・将来の人と自然の望ましい関係を意識した管理を行うこと
- 島民や登山者（世界遺産や国立公園の利用者）だけでなく、日本・世界の模範・見本となる管理を行うこと

### 【未来像・目標(100年後の目指す姿)】

#### (1)原生性、神聖性、数千年レベルの時の流れ、つながりと循環、自然の恵みと厳しさが残る山(島)

- ①利用者は、樹齢数百年・数千年の巨樹や、数百年生の森（針広混交林、照葉樹林）、無数の流れ、人工構造物のない原生的で荘厳な森林景観・山岳景観を歩いて見ることができる。
- ②利用者はそこで、人の一生よりはるかに長い時の流れ、人間の存在がいかに小さいか、生物や物質のつながりや循環を感じることができる。
- ③利用者は、原生的で荘厳な景観を見ることができるだけでなく、そこで清澄な空気や水の恵みを享受することができる。また、同時に、今も人を寄せ付けない荒々しさや恐ろしさを感じ、畏れを抱くことができる。

【注】利用者とは、全ての利用者を指すものではない。

#### (2)登山初心者から上級者まで自然を深く堪能できる山(島)

- ①屋久島を訪れる利用者は、事前に、あるいは入島後に入手した登山情報から、自分の経験や技能、求める体験の質に応じた登山ルートを選択し、自然を体験することができる。
- ②登山ルートは、ルートのランクと管理方針に応じた管理（施設整備・維持管理、ルール設定等）がされており、利用者はルートのランクに応じた自然環境・体験の質と安全が保証されている。
- ③体験の質や利用による自然や畏敬の念を抱かせるものへの悪影響はモニターされ、その結果が管理に反映されている。
- ④上級登山者は、定められたルールの範囲内で、自らの責任のもと自分の可能性を試す登山を行うことができる。
- ⑤全ての利用者は、屋久島山岳部の自然と畏敬の念を抱かせるものを守り、継承する重要性や人と自然とのかかわりを学ぶ・考える機会を得ることができ、これらを理解・尊重して利用を行っている。

#### (3)人と自然の関わり方、新しい山の文化を模索し、発信する山(島)

- ①利用者は、屋久島に來れば、島の伝統的な自然観や人と自然との関わり方を学ぶ機会を得ることができる。
- ②島民は、歴史も踏まえた時代に応じた山との関係性を維持し、山への畏敬・感謝・遠慮の心を持ち続けており、世界遺産や国立公園の管理もそれを踏まえたものとなっている。

③島民と世界遺産や国立公園の管理者は、自然環境の保全や質の高い利用体験の提供を含む人と自然との関わり方を模索しながら試行錯誤を繰り返して世界の模範・見本となる「新しい山の文化」を築き、発信し続けている。

④利用者は、屋久島が発信する「新しい山の文化」に惹かれて来島し、人と自然との関わり方を考え、新しい山の文化を他地域に広めていく。

## 【基本方針】

### ■自然環境の厳正な保護

・自然環境を厳正に保護し、原始的で荘厳な森林景観・山岳景観や清澄な空気や水の恵み、今も人を寄せ付けぬ荒々しさや恐ろしさを感じさせる環境や雰囲気を持続もしくは現状より向上させる。

### ■過不足のない適切な管理(施設の整備・維持管理、利用者管理など)

・施設の整備過多や維持管理過剰にならないよう管理を行うとともに、場に応じた利用の質（種類、行動）や量（数など）の管理を行う。

### ■登山ルートごとの利用、管理方針(水準)の設定

・屋久島なりの ROS を取り入れた考え方で、登山ルートごとに自然度やルート難易度などによって、初級者を想定した便利さや快適さを考慮したゾーンや、上級者を想定した原始的な自然環境の保全や体験が優先されるゾーンなど数段階に区分して管理・利用体験の提供を行う。

### ■情報の発信・提供

・利用者が自らの判断で登山ルートの選択など登山計画や準備ができるよう、登山ルートの難易度、利用ルールなどの登山情報（ランク、登山時間、施設案内、降雨時の注意喚起ほか）を提供する。  
・屋久島山岳部の自然環境の保全と質の高い利用体験の提供に関する取り組みについての情報を積極的に発信する。

### ■個別管理者の責務の遂行と、管理者・関係者の高度な連携による管理

・個々の施設管理者は責任を有する施設等について、登山ルートのランクに応じた施設の整備・維持管理等の管理（危険要素・自己責任の範囲などの情報提供含む）を適切に行う。  
・国、県、町（世界遺産等の管理者および施設管理者）と関係者は、情報共有など高度な連携により一体的な管理体制を構築する。

### ■体験の質や自然環境等への影響の把握と、影響への対応実施基準の明確化

・利用体験の質や自然環境等への影響をモニタリングし、その結果を管理に反映する。  
・モニタリングの項目・指標を設定するとともに、対応策を検討する・講じる基準を明確化する。

### ■人と自然の関わり等を学ぶ機会の提供

・屋久島の動植物、地理、歴史、文化などの情報や展示をしている施設や、レクチャーを通じて、自然

とともにある歴史・民俗・文化や自然環境の保全と質の高い利用体験の提供に関する取り組みを学ぶ機会を提供する。

■地域の伝統的な人と自然の関わりに配慮した管理

・屋久島の自然に根ざした文化の基盤となっている、伝統的な人と自然との関わりに配慮した管理を行う。

■様々な関係者を巻き込んだ管理体制

・多くの島民が直接的、間接的に山岳部に依存している屋久島の様々な関係者・機関（行政、住民、民間業者、学識経験者等）による合意形成を行いながら屋久島山岳部の自然環境の保護と質の高い利用体験の提供を行っていく。

■意識を高く持った管理(自然環境の厳正な保護と質の高い利用体験の提供)

・自然環境の厳正な保護と質の高い利用体験の提供を実現するため、様々な課題や状況に対して現状に満足せず（、過去に縛られすぎず）に、よりよい管理を行っていくことを目指す。